「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～ 第５回優秀賞作品

「妖怪文化と畏敬の心」

海南省　李芯儀

小さい頃、私は、両親が残業のため、家で独りぼっちになることがあったが、あの孤独な夜は得も言われぬ怖さだった。上の階から玉の落ちるようなトントンという音が絶えず聞こえてきて、私は心臓を叩かれるような感じがした。偶然めくれ上がったカーテンの向こうが青紫色の光に照らされ、ぞっとする眺めだった。

真夏の夜なのに、私は押し入れから綿布団を出してきて、きっちりとくるまったものである。分厚くて重たい布団で汗だくになれば、妄想の中の“怪物”を遠ざけることができそうな気がしたからである。こうして思い出してみると可笑しいのだが、子供の頃は、未知の事物に対して恐れや憧れの入混じった緊張をするものであるし、その感情は成長しても完全に消えるものではないのだ。すっかり大人になったと自認する今でも、あの頃と似た闇夜になると、まだ「そもそも妖怪なんていない」と自分に言い聞かせつつも、奇跡が起こるのを期待してしまうことがある。夜のとばりを切り裂いて、誰かが天から降り立ち、怪しいながらも怖くはない笑顔で、全てが単なる妄想ではないのだと告げてくれはしないかと待ち望んでしまうのである。

大学では日本語を学んだのだが、先生に「日本の何が一番好きか」と聞かれた時には、私は迷わず「妖怪文化」と答えた。あるクラスメイトには「とても奇怪」と言われたが、却って私は本当のことを言えるのは愉快だと感じたものである。私は、以前から様々な神霊伝説の類が異常に好きだったし、“八百万の神”がいると言われる日本は、疑いなく世界で最も神霊文化の豊かな国なのである。こうしたことは、私が日本に触れ日本を深く理解したいと渇望するようになったきっかけの一つでもある。

魔獣が一貫して邪悪なイメージである欧米と違って、日本の妖怪の世界は、正邪がそれほど明確には分かれていない。人の命を奪う悪霊もいれば、無害だったり、時々いたずらするだけだったりの妖怪もいる。人と殆ど関わらずに善悪の境界線を漂って、人間社会の影の中で悠然と暮らしている妖怪はさらに多い。聞くところによると、日本の妖怪の多くは、中国にその原型を見出すことができるそうだが、今や中国には、妖怪文化が育つ土壌は無くなっていて、ホラー映画では人食い幽霊や多情な女の霊といったものが見られるものの、古い神話の妖怪が暮らしの中で言及されることは殆どない。

しかし、日本では、妖怪を題材とする小説、漫画、映画が次々と出てきて、妖怪文化を専門的に研究する学科や学者も増え、目も眩むほど様々な妖怪が人々の日常生活を彩り、不思議で面白い姿を度々見せてくれ、人間臭くて活発で可愛い妖怪が現れることさえあるのだ。日本の妖怪の大多数は人々に嫌われることなど決してなく、むしろ好かれているのだが、これは概ねこうした事情のためなのだろう。そして、私も、世界各地に存在する日本の妖怪ファンのひとりなのである。

『日本妖怪大全』を買ったばかりの頃、私は、いつも寝る前にそのページをめくっていた。何ページか読んで満足してから眠りに就いて、自分が想像する妖怪達と夢の中で出会ったものである。私がずっと抱いていた幻想では、真夜中に人間が表面世界全体を覆う巨大な翼をたたみ、夢の中で最も原始的な自我に返る時、別の世界からの客人が気泡のように地面の裂け目から現れるのである。彼らは美しい彩りの身体や透明な身体を持ち、人の姿をした者や動物に似た者がおり、物や精神に化け、霧のように変幻自在な姿をとれる者もいる。美麗かつ奇怪、神秘的でオープンな彼らは、最も深い闇夜の中で無数の華麗な伝記を展開するのだ。

妖怪を研究する学者達によると、日本の妖怪文化が異常なほど豊かなのは、日本人が島国に暮らしていることによる不安と密接な関連があるという。日本では自然災害が多発するため、人々は自然が持つ力に対してより深刻で複雑な感情を抱いている。この複雑な感情を的確に総括することができるのは、おおよそ“畏敬”の二文字に限られるだろう。こうした畏敬の心こそ、鬼神に関わる伝説を日本に広く伝播させ、唯一無二の“妖怪文化”を作り上げたものでもある。妖怪の世界は人間界の投影であり、多くの人々が妖怪を好み研究するが、これは決して盲信からではなく、こうした独特で奇怪な想像を通して、人間自身が思想の深くに隠している心理を窺い知りたいと思っているからである。

今年３月に日本で大地震が発生してから瞬く間に半年余りが過ぎた。あの地震を思い出す度、日本に住むある中国人が書いた、地震後の心痛む細かなことが胸をよぎる。いつ来てもおかしくない余震に備え、人々はいつも寝る前にホイッスル、懐中電灯、ミネラルウォーター、保存食を枕元に置いていたという。万一、地震が来て避難できなくても、こうした物があれば、生き延びられる可能性が高まるからとのことだ。この話を聞いて、私の心の中には敬服と悲哀の感情が同時に湧き上がった。痛みを味わっても依然として勇敢さを失っていないこれらの人々は、屈することなく予期できぬ苦難に絶えず立ち向かい、死中に活を得るのである。この絶体絶命の中での冷静さ、そして、それでもどうしようもない状況は、共に私の心を深く揺さぶった。

広い世の中のちっぽけな生命として、人が、世界に対する畏敬の心を終生持ち続けることができるのなら、それは貴く感心に値することなのである。心にいつも畏敬を抱いている人は、自分の足りないところをより意識することができ、豊かな心を持って、悲しみと哀れみを理解し、自省すること、寛大に許すこと、大切にすることを理解するのである。日本の彩り豊かで美しい妖怪文化は、人々の万事万物に対する畏敬の心が特殊な形で現れたもののひとつかもしれない。そこには日本国民の強靭な意志と軽妙さやロマンを忘れない心持ちが示されている。同時に、長い間衰えることのない妖怪文化も、自然と生命に対して畏敬を決して忘れないよう人々の注意を喚起している。

現代の社会生活のリズムが日増しに加速しているため、妖怪伝説は次第に人々の生活からフェードアウトするかもしれないと言う人もいる。しかし、もし都市の喧噪が静まりかえった暗闇に残る最後の神秘的な息吹を本当に消してしまったら、私たちは、科学技術の発展と文化の進歩に喜びを感じると同時に、かけがえのない多くの物語を失ったことに残念な気持ちを覚えることだろう。つまり、妖怪に驚いて布団に逃げ込んだことがない子供の少年時代は、きっと楽しみも幾分少なかっただろうということである。